スゴ腕発見!!

成功を収め、栄光をつかんだ方がいます。後への抱負を語っていただきました。

「一意専心」
～ボクシング一筋の人生～
諦めない気持ちを伝えたい

田中　浩二さん（40歳）山本在住

フライ級の初代チャンピオンに輝く

近年、さまざまな格闘技が注目を集める中、出場資格33歳以上のボクシング経験者を対象としたボクシング大会が、今年、東京都新宿区で初めて開催されました。その名も「ザ・おやじファイト」。試合は、3分3ラウンドとし、ヘッドギア着用に加え、14オンスのグローブを使用するなど、安全面にも配慮しています。

この大会に出場し、見事、フライ級（50・802キログラム以下）で初代チャンピオンに輝いたのは、ボクシングスタジアムTANAKAの代表を務める元プロボクサーの田中浩二さんです。

田中さんは「ベルトを手にした瞬間は、何ともいえない喜びを感じました」と満面の笑みを浮かべます。

現役引退　そして指導者へ

同大会に出場する選手たちの肩書は、証券マンや教師、果ては国家公務員や会社社長と、実に多種多彩。彼らは仕事の合間にボクシングジムに通い、人知れず流した汗の成果を、この大会で競い合いました。

田中さんは、プロ初戦をKOで飾り、4戦連勝と華々しく道を歩み始めました。

しかし、試合で負ったケガに悩まされ、22歳の若さで現役を引退後、会社員などのサラリーマンを経験。その後、スポーツトレーナー、整体師を続ける傍ら、平成17年に、但馬地方初のボクシングジムを開き、ボクシングの底辺拡大に力を注いできました。その他、市内の各施設に出向き、子どもや女性を対象としたボクササイズや健康体操などのカルチャースクールの講師も務めています。

折り返しととらえた35歳からのスタート

一方、ボクサーとしての道を模索している中、昨秋、同大会を知り、「ジム生の刺激にしたい」と出場を決意しました。階段ダッシュやサンドバッグへの打ち込みなどを続け、体力づくりを中心に鍛えてきました。その結果、両肩の筋肉は盛り上がり、腹部はきれいに割れるなど、シャツを脱いだ体は、40歳には見えないほどに仕上がっています。

田中さんは、「現役のころよりコンディションはいいですね」と自信をのぞかせていました。

「シャープ・タナカ」。リングでそう呼ばれる田中さんは、スピードと鋭さを武器にして初代チャンピオンの階段を上り詰めました。「人生70年と見据え、折り返しを過ぎた35歳で一念発起しました。子どもたちには、ボクシングというスポーツを通じて、人の痛みを知り、心の強さを身に付けてほしいです。より多くの人にボクシングを知ってもらえればうれしいですね」と田中さん。いつまでも夢を諦めず進み続ける姿が、ジム生の瞳に焼き付けられていました。

【プロフィール】
昭和42年、豊岡市に生まれる。元プロボクサーの整体師で、ボクシングジムの会長を務める傍ら「気軽にボクシングにふれてほしい」とボクササイズ教室も展開中。朗らかな性格が印象的な体力自慢の40歳。

▲ジムに通う会員に熱のこもった指導をする田中さん

▲女性にも参加しやすいボクササイズ教室

わがまち

市内には、それぞれの分野で結果を残し、その方にインタビューし、体験談や今

「力必達」
～力（つとむ）れば必ず達する～

生涯現役で戦い続けたい

岡田庫二郎（くらじろう）さん（73歳）中央町在住

世界マスターズ柔道選手権大会で堂々銀メダル

近年、生涯スポーツの普及・振興を図るため、競技志向の高いシニア世代を対象としたスポーツ大会が盛んに行われるようになりました。

そのような中、30歳以上の柔道経験者を対象とした第9回世界マスターズ柔道選手権大会が、6月19日～23日の5日間、ブラジル・サンパウロ市内で開催され、海外での世界大会初参加の岡田庫二郎さん八段が、M9（70歳～74歳）・60キログラム級で堂々銀メダルを獲得しました。

この大会には、世界42カ国から約1、000人が参加。岡田さんは、並み居る強豪を相手に一本勝ちで勝ち進み、銀メダルに輝きました。

「今回初めて海外での世界大会に参加しましたが、24時間かけて出場したにもかかわらず、全く汗もかかずに試合が終わってしまいました。やはり『継続は力なり』という言葉どおりだと思いましたね」と笑顔で話していました。

継続は力なり

「この大会のことを柔道新聞で知り、力だめしをしたくなりました」と話す岡田さん。参加を決めてからは練習にも気合が入ります。昼間はシルバー人材センターで植木の剪（せん）定の仕事をし、週2回、市民体育館で柔道教室の指導をする傍ら、豊岡高等学校などでクラブ活動の指導にも当たり、自らの練習もこなします。また、今年の1月から始められた小学生の登下校時の防犯パトロールでは、立ち番の合間に、朝夕ともに足払い500回ずつの計1、000回を毎日こなしました。「この継続が功を奏し、試合ではとっさに足技（小内刈り）が出たのでしょうね」と試合の様子を振り返ります。

教え子から元気をもらいさらなる目標へ

「世界大会では、サンパウロ総領事館の表敬訪問やブラジルの柔道愛好家との交換稽古など、とても日本では経験できないことばかりでした。まさに草の根外交ですね」と笑顔で話します。17歳から始めた柔道を今も続け、さらなる精進に余念のない岡田さんは、「柔道が今一番の楽しみです。子どもたちには元気をもらっています。できる限り戦い続けたいですね」と話す姿は、とても73歳には見えない引き締まった体で姿勢もよく、動きも軽やかです。「来年もベルギーの世界大会を目指します」と笑顔で話す岡田さんの目は希望に満ち溢れていました。

【プロフィール】

昭和9年、島根県太田市に生まれる。高校のときに柔道に出会い、その後大阪市の民間会社を経て大阪拘置所に勤務する。30歳で豊岡拘置所勤務となり、その後、旧豊岡南高等学校や豊岡高等学校で非常勤講師として柔道を教える。その間各種大会に参加し、八段を取得する。

▲柔道教室で指導する岡田さん

◀柔道教室の教え子と共に道場で